青年よ アウクスブルクをめざせ

副団長　味田　綾乃

大丈夫か、私？

「アウクスブルク」。

３０年以上、尼崎市役所に勤めているので、これがドイツにある姉妹都市の名前であることは承知していた。

けれど、そこがどんな街で、どんな人が暮らしているのか、どんな交流を続けてきたのか。考えることも知ろうとすることもなかった。ヨーロッパにプライベートで旅をすることはあっても、その行先の候補に入ることもなかった。

そんな街、アウクスブルクに思いもよらない出張が決まった。しかも親子ほど年の離れた青年たちと共に１０日間を過ごすことになるのだという。

溢れるような前向きな熱意でこの派遣に応募してきた青年たち。対して、知識もやる気も少々乏しい副団長である「私」。彼らは、こんな私を見て「この人で大丈夫？」と心配していたのではないだろうか。

２週間後にはアウクス！という頃。ますます「私に副団長が務まるのかしら？！」と不安になってくるわ、奥歯が真っ二つに割れるわ、風邪は引くわ。

おぼつかない体調のまま、少々ヨタヨタしながら一路、ドイツ連邦共和国バイエルン州アウクスブルク市へ！！

恐縮してしまった空港でのお迎え

関空からドバイを経由して、アウクスブルクまで、ほぼ一日がかりの移動。

エミレーツ航空の機内食が美味しかったことと、エンターテインメントサービスで映画「あまろっく」が見られたことで、体調の悪さもかなり回復。そして、いよいよミュンヘン到着。

経由地のドバイ出発が１時間遅れ。しかも入国審査でさらに１時間遅れ。そもそも移動時間が長いので悠長にかまえていたのだが、出迎えのために空港の到着口で待ってくれていたアウクスブルク市市長局の職員と日本人通訳の皆さまには結局３時間もお待たせするはめになった。

しかも、私たちより遅く到着する予定だった長浜市使節団の皆さまにも移動用のバス内でじっとお待ちいただいていたようで、その間、長浜市団長の体調がみるみる悪くなっていたことを後々知ることになった。恐縮至極の第１日目の始まりとなってしまった。

ホストファミリー・ミーツ・青年

さて、なんとかかんとか皆さまと合流し、遅れを取り戻すかごとく速度無制限道路アウトバーンを走り、最初の集合場所であり、最後の別れの場所となるアウクスブルク市内の消防署に到着。

そこには、今か今かと我々を待ちわびてくださっていたホストファミリーの皆さま。ちょっとした挨拶の後、青年たちは一人ずつ名前を呼ばれ、各々のホストファミリーと対面。そそくさと各家庭へ臆することなく足早に立ち去っていった。

我々大人は「いってらっしゃい！楽しんで！」と青年たちに声を掛けるべきだったのだろう。でも、あまりにあっけなく青年たちが次々と消えていったので、声を発することもできずに立ちすくんでしまった。取り残された形となり、その気まずさをごまかすために、アウクスブルク市職員の皆さんに「ドイツで消防車を呼ぶのは電話番号何番ですか？」「消防と救急は同じ番号ですか？」とか、どうでもいい質問なんかしてしまった。

本当は青年たちがうまくホスト一家となじめるのかが心配で、大声で応援したかったのだけれど。照れくささに負けてしまった。ちょっと反省。

はしゃげばいいよ

翌日から１週間、びっしりと組まれたスケジュールのひとつひとつを堪能する日々。

今回の使節団は、コロナの影響もあり6年ぶりのアウクスブルク訪問となった。それまでは隔年で催行されてきた。いきおいその訪問先は前回と同様の場所や体験になりがち。しかし、主役の青年たちにとってはすべてが「はじめての体験」。さすが関西の青年たち。「ここで楽しまなくてどうする！」「おもしろがってなんぼ！」という勢いで行く先々ではしゃいでいた。

帰国後にこっそり聞いた話。フュッセンの樹木公園で小川アスレチックにムキになりすぎた青年たち。膝から下がずぶ濡れになり、バスの中で靴とズボンを乾かすのに必死になっていたとか。そういえば、アスレチックから戻った後、彼らの私への態度がぎこちなく、それは「副団長に知られたら叱られる」と思ったからなのだとか。

私、そんな狭量じゃないのになぁ。はしゃげばいいよ。めいっぱい楽しんで欲しい。学んで欲しい。

職場では部下たちの目線が気になる。アウクスブルクでは青年たちの目線が気

になる。実はオバさんは、若者の目を気にしてビクビク、ヒヤヒヤ、モヤモヤしてしまう生き物なのだ。

小さなものでも喜んでくれるんだ

さて、副団長としての役目で意外にも大変だったのが、アウクスブルクで出会う皆さんへの「お土産配り」だった。たかがお土産。されどお土産。

お土産は段ボール２箱分。アウクスブルク市の、誰とどこで会うかのリストがあり、そのひとりひとりに別々のお土産をお渡しする必要があった。しかし、まずもってドイツ語の名前が読めない。男性の名前か女性の名前かも判然としない。相手も自分の名前入りのプレートをつけているわけでもない。これには困った。

幸い日本人通訳さんが同行してくれていたので、「この名前は、この人のこと？」とこっそりリサーチして冷や汗をかきながら乗り切った。しかし、それが日中の訪問先から夜の会食の場まで延々と続くので、いつでもどこでもずっとリストとにらみ合い。しかも時にはリストにない人が現場に飛び入り参加したりもするのでプレッシャーも難易度も上がってしまう。

そんな苦労をして渡したお土産を皆さんとても喜んでくれた。尼崎市内の障害者作業所で作成された「和柄がまぐち」、「水引付きピン」、「手漉きうちわ」や「尼崎城ボールペン」、「白髪一雄画集」など、尼崎や日本にまつわるお土産の１点ずつに英語の説明文と団員が折った折り紙を付けてお渡し。受け取ってくださった皆さまには、お土産のチョイスやセンスにもご満足いただけたよう。フェアウェルパーティの景品にした「キットカット抹茶味」や「おにぎりせんべい」などのお菓子は説明せずとも喜んでもらえた。みんな大好き「ハッピーターン」も大好評だった。

街の課題は独日違い、独日いっしょ

青年たち向けのプログラムとは別に団長・副団長は、興味のあるアウクスブルク市の業務に関して担当者からお話を伺う機会が与えられた。私は、AUGSBURG INNOVATIONS PARK 訪問とアウクスブルク市の環境に係る取組の２項目について参加。

ヨーロッパ最大級、約 70 ヘクタールの敷地を有する AUGSBURG INNOVATIONS PARK では、常務の Wolfgang Hehl 氏のプレゼンを拝聴。「ここに集まる企業の操業環境を整えるための投資は、企業の成長を支援し、価値を高める。ゆくゆくは、税収増となって市に還元される。」「しかし、その成果が実感できるまでには時間がかかる。」

またここでは、技術力のある中小企業を支援されているが、「中小企業のモチベーションを維持・向上させることが、一番難しい」とおっしゃっていて、それは、尼崎市でも同じことが言えるのではないだろうか。

環境に係る取組については、姉妹都市提携50周年（2009年）で来尼してくださったReiner Erben専職議員にお話しを伺った。「環境意識の高いドイツの方々は、後々ゴミになるプラスチック包装していない野菜や果物を選んで購入するのですか？」と勝手なイメージの無知な質問をしたところ、脇からドイツ在住半世紀以上の通訳さんに「そんなわけないじゃない！」と一喝されてしまった。ドイツ人だって、スーパーで買い物するし、スーパーの商品はしっかりプラスチック包装されているとのこと。そのあたりは日本人の意識と大きな差はないようだ。

ゴミ収集は、各家庭前に置かれている4 色の専用ボックス（グレー：可燃ごみ、イエロー：プラごみ、グリーン：紙ごみ、ブラウン：堆肥になるもの）に曜日・時間かかわらず入れておけば定期的に収集される。

尼崎市のごみ袋を持参したのだが、「透明で中身が見えるのはいいのか？」と言われてしまった。確かにアウクスブルク市の場合、専用ボックスの蓋を開けない限り、中のごみを気にする必要がない。高さのある 4 色のボックスが各家庭前にズラリと並んでいるわけだが、不思議とヨーロッパの古い街並みに馴染んでいる。年間通じて気温や湿度が日本の平均より低いので臭い問題も起きないのだろう。

そういえば、アウクスブルク市内の建物には、よほどリッチなホテル以外、クーラーがない。気温 35℃の日本から到着してホテルの部屋に入った瞬間、いつもの癖で空調のスイッチを探したけど、どこにもなかった。日本より涼しいといえども到着したその日は、半袖で十分な気温。これ、大丈夫？と不安になったが、夜にはしっかり気温が下がり、天井高の窓を開ければ心地よかった。ちなみに部屋は 3 階だし、隣の建物とも接していないし、滞在中、窓を閉めることはなかった。

Reiner Erben専職議員から、環境課題として自家用車所有率の高さをあげられた。

アウクスブルクは、郊外に住宅地が広がっていることもあり、どこへ行くにも自家用車を利用する家庭が多い。このことから、渋滞緩和と CO2 排出量削減の取組を重視されている。現在、市中心部への車の乗り入れを制限し、2040 年までに自家用車所有率の 50%削減を目指しているとのこと。

アウクスブルクにはアウクスブルクの、尼崎には尼崎の生活文化、環境、気候、習慣、住民意識に即した課題への取り組み方がある。学ぶべきは学び、カスタマイズすべきはカスタマイズし、地域に最適化した取り組みが重要だということを再認識した。

バウムクーヘンと通訳さん

余談ながらドイツといえば「バームクーヘン」だ。

私のイメージでは、そこここに売っているものと思いきや、大間違い。バームクーヘンはクリスマスの食べ物らしく、ホテルのそばにあった老舗洋菓子店 Euringer では、月曜日にしか焼かないらしい。ドイツのバームクーヘンをどうしてもお土産にしたい！と通訳さんにお願いしたところ、最終日にミュンヘン観光に連れ出してくれ、バームクーヘンの老舗店 Kreutzkamm へ連れていってくれた。本場のバームクーヘンは、日本のものより固め。ホイップクリームを添えて食べるのが定番らしく、ホイップの油分がちょうどいい感じでほっこりする。

通訳さんには、こんな風に私たちの「〇〇したい！」や「□□はどうすればいい？」といった要望から困りごとまで本当に丁寧に受け止めていただき、ホテル暮らしではあったけど、私にとってホストファミリーのような存在だった。

前述の長浜市団長は日程の大半体調が悪く、ドイツ食をほぼ食べられなかったのだけれど、通訳さんに鮭おにぎりやら焼うどんやらを作ってもらっていた。それと同じものをベジタリアンのアウクスブルク市職員が美味しそうに相伴にあずかっていたのがちょっと羨ましかった。

私は、同行してくださった通訳さんたちとの出会いがあったことで、アウクスブルクの印象が断然いいものになった。

思い残すことは必ずある

そういえば、ミュンヘンで高級食材専門店 Dallmayr に連れて行っていただいた。下調べもせずに行った私だが、関西のイカリスーパー、関東の KINOKUNIYA をデパ地下寄りにした感じの店内で物欲が一気に加速。男性陣をお待たせすることになってしまった。そこで自分用に購入したコーヒーが美味しくて、これ、日本でも買える？と検索したところ大阪中之島にある AMADEUS　STORY で購入可能だった。カフェがメインの店内、アウクスブルクで食べ損ねたアップルシュトゥルーデルを頬張りながら、どこにいても、世界のいろんなものが手に入る日本って凄いものだと感心してしまう。

「あの時、買っておけば良かった」「食べておけば良かった」と思いを残すのが旅なのだが、こんな風に日本にいても手に入れることは可能だったりする。ただ、その時、その場所の雰囲気や出会う人、その人たちとの関係はそこでしか手に入れることができない。

人生の半分以上を過ごしてしまって、このことをよりはっきりと意識するようになった。しかし、分かってはいてもその一歩が踏み出せず「本当はもっとお近づきになりたいのだけど、、、、」と思い残すことも多い。

眩しい日本の青年たちへ

今回、10 日間を共に過ごした青年たちとの出会いは、私にとってはかけがいのないものであったことは間違いない。青年たちは、どうだろうか。

世界の政治、文化、流行からゴシップまで様々な情報が、どこにいても入手できる今の時代。また、海外旅行も行こうと思えば個人でも行ける。なのに、知り合いでもない同世代の青年と歳の離れたオジさんとオバさんと団体での行動。しかも、市の看板を背負って行く使節団に応募してきた青年たち。応募動機は「個人では行けない場所に行ける」「ホームステイで現地の生活を実体験できる」「団体だから安心」と様々。

団員選考面接から彼らを見てきて思うのは、今時の若者らしく、語学ができて団体でもお互いの距離感をうまく保ちつつ、自己実現する。

こんな彼らが、眩しく、これから出会う様々なことにも今の輝きをなくさず、その一瞬一瞬を精一杯生きていって欲しいと心底願う。そして、尼崎市民として経験したアウクスブルクでの日々、感じたことを忘れないでいて欲しい。

今回のアウクスブルク出張を終え、この年齢でも、新たな出会いがあって、そこから気づきや学びがあることを実感。仕事を通して、こんな経験ができたことに感謝します！！

アウクスブルクでの行程や様子については、同ページにある動画『Augsburg での日々 2024』をご視聴ください。

デジタルネイティブの青年たちがフェアウェルパーティ用に動画を作成している姿を見て、今どきはこれよね～とデジタルイミグラントの私ですが、青年の助けを借りて作成しました。